



甲虫ニュース

COLEOPTERISTS' NEWS

No. 14 (Nov. 1971)

カミキリムシの研究史（3）

草間慶一

（8）属の性格変更について

前号でも述べたように、古い属では誰がその属を規定したか後世の研究者により色々と意見が分かれている。その為に同じ属名でも設立者名が異なる場合が多く、属の設立者が変更になると、その模式種も指定者にも影響が及び、属の性格が変更されることがしばしばある。まず最も混乱したと思われる *Stenocorini* (*Toxotini*) について述べて見る。

（i）*Stenocorini* か *Toxotini* か

この問題については、その基礎になる属、すなわち *Stenocorius* と *Toxotus* について考慮しなくてはならない。それには、*Stenocorius* Geoffroy と *Rhagium* Fabricius の関係に言及する必要がある。

Geoffroy が 1762 年に *Stenocorius* を作った時、最初の種に「光沢があり、黄斑を有する」と記述したが、二名法に基づく名前をつけなかった。1785 年に Fourcroy がこの種に *S. parisinus* と命名した。Fabricius は 1775 年に *Stenocorius* 属を採用したが、別に *Rhagium* 属を作り、上記の種は *Rhagium* の方に入れ、*R. bifasciatum* と命名した。Thomson (1860) は近代的な命名法ではないが、Geoffroy の記載で充分理解出来るとして優先権を認め、1864 年には、*St. parisinus* をこの属の模式種として、*Rhagium* を *Stenocorius* のシノニムとした。Fairmaire (1864), Lacordaire (1869), Seidle (1891) らがこれに従い、最近では Gressitt (1951, 53) がこの説を再主張し、Dillon et Dillon (1961) もこの説を用いている。

一方 Serville (1835), Curtis (1839), Mulsant (1839, 62), Aurivillius (1912) らは、*Stenocorius* Geoffroy を認めず *Rhagium* Fabricius (1775) を独立属とした。

1800 年代では *Stenocorius* Geof. と *Rhagium* F. とは、どちらを使用するかの差はあっても実質的には同じものであった。

Rhagium の模式種の指定は Curtis が 1839 年に *Cerambyx inquisitor* Linne と発表しているが、ほとんどこの指定は無視され、*Stenocorius* と同じ

bifasciatum Fab. と考えられていたので、Samouelle (1819) の *Harpium* を *Rhagium* の亜属として使用する人が多く、その模式種は *Cerambyx inquisitor* L. とされていた。

1954 年に *Stenocorius* Geoffroy が廃棄され、*Rhagium* Fabricius の方を採用する事が決定されて、この問題には終止符が打たれたが模式種については依然として混乱しており、*bifasciatum* を採り、*Harpium* 亜属に *inquisitor* を入れる説 (Podany, 1964) と、Curtis の指定に優先権を認め、*inquisitor* を *Rhagium* の模式種として、*Harpium* をこのシノニムとする説 (Chemsak, 1964) がある。

次に *Stenocorius* Fabricius と *Toxotus* の関係について述べよう。

前述のように 1954 年以後 Fabricius による属の性格に従って *Stenocorius* を用いなくてはならなくなつた。しかしこの *Stenocorius* Fabricius は長い間使用されておらず、1800 年代では Bedel (1889) くらいであったが、Aurivillius (1912) が採用してから再び色々の人が用いるようになった。

Fabricius が初めて 1775 年に *Stenocorius* を記述した時、一番最初の種は *Leptura meridiana* L. であったが、1792 年には他の属に移ってしまった。

Swaine et Hopping (1928) はこの属の模式種として *Cerambyx inquisitor* L. を指定し、Gressitt (1951) も *Rhagium* を *Stenocorius* のシノニム（亜属として残したが）とした。しかしこの *inquisitor* は、1775 年の時は *Rhagium* の方に入っているので、模式種とは認められず（規則 VI-i, iii），1936 年に Plavilstshikov が指定した *L. meridiana* が正しいと、Chemsak (1964) は主張している。

一方この種は Plavilstshikov の指定した時よりも約 100 年も前に Westwood (1840) が、*Toxotus* Dejean の模式種として指定しているのである。従来は Dejean の業績を全く認めて居ないので、この処理に問題はなかったが、アメリカ学派のように Dejean のカタログを認める立場に立つと、命名規約 (IV-iv) から既に他の属の模式種として指定さ

れても別にかまわないと言うもの非常に異例の取り扱いですっきりしない感じである。

Toxotus 属は古くは Serville 設立 (1825) として用いられているのが多く、Thomson (1860) は

模式種に *Rhagium cinctum* Fab. を指定した。Mulsant (1863) も大体この意見に従っているが、*Cerambyx cursor* L. (1758) をもって (monobasic), *Oxymirus* 属を新設した。しかし *R. cinctum* Fab.

第6表 *Rhagium*, *Stenocorus* および *Toxotus* 属の設立者

文 献	属	<i>Rhagium</i> (Rhと略す)		<i>Harpium</i>		<i>Oxymirus</i>		<i>Toxotus</i> (Toと略)		<i>Stenocorus</i> (Stと略)	
		Fabricius (1775)	Samouelle (1819)	Mulsant (1863)	Dejean (1821)	Zetterstedt (1829)	Serville (1835)	Geoffroy (1762)	Fabricius (1775)	(脚注)	
Thomson (1860)	x (St)						○	○			
Mulsant (1863)	○			○			○ ○ ○	○ ○	x ^{a)} (To)	x (Rh) ¹⁾	
Lacordaire (1869)	x (St)			○ ○			○ ○ ○	○ ○		x ^{a)} (To) ²⁾	
Ganglbauer (1881)	○ ○			○ ○			○ ○ ○	○ ○			
Pic (1900)	○ ○	⑧(Rh)		○ ○			○ ○ ○	○ ○			
Aurivillius (1912)	○ ○	⑧(Rh)	x (To)		○		○ ○ ○	○ ○			
Reitter (1912)	○ ○ ○	○	○ ○	x (St)	○		x (St)		○ ○		
Picard (1929)	○ ○ ○		○ ○						○ ○	○ ^{a)3)}	
Winkler (1929)	○ ○ ○	⑧(Rh)	x (To)		○ ○ ○					○ ⁴⁾	
Plavilstshikov (1936, 48)	○ ○ ○	⑧(Rh)	x (To)		○ ○ ○						
Gressitt (1951)	⑧ (St)	x (St)	○ ○	○ ○ ○	○ ○ ○		○ ○ ○	○ ○ ○	x (To)		
Dillon & Dillon (1961)	x (St)			○ ○ ○	○ ○ ○		○ ○ ○	○ ○ ○			
Chemsak (1964)	○ ○ ○	x (Rh)	○ ○ ○	x (St)			x ^{c)}	○ ○ ○			

○：属を認める。⑧：() 中の亜属。×：() 中の属のシノニム

a) : *Stenochorus* とスペル、b) : Serville, Thomson と 2 名が書かれている。c) : 1954 年の動物学命名法の国際会議で廃棄。

1) : Olivier (1795) (ex parte) 2) : Bedel (1889) 3) : Müller (1764),

4) : Batés, ミスプリントか

第7表 *Rhagium* およびその関連する属の模式種と指定

属名	設立者(年代)	模 式 種	指 定 者
<i>Rhagium</i>	Fabricius (1775)	<i>Cerambyx inquisitor</i> L. (1758)	Curtis, (1839)
		<i>Rhagium bifasciatum</i> Fab. (1775)	Plavilstshikov (1936)
<i>Hargium</i>	Samouelle (1819)	<i>Cerambyx inquisitor</i> L.	Monobasic
<i>Oxymirus</i>	Mulsant (1863)	<i>Cerambyx cursor</i> L. (1758)	Monobasic
<i>Toxotus</i>	Dejean (1821)	<i>Lepura meridiana</i> L. (1758)	Westwood (1840)
	Zetterstedt (1828)	<i>Cerambyx cursor</i> L.	Plavilstshikov (1936)
	Serville (1835)	<i>Rhagium cinctum</i> Fab. (1787) = <i>Leptura Schaefferi</i> Laicharting (1784)	Thomson (1864)
<i>Stenocorus</i>	Geoffroy (1762)	<i>Stenocorus parisinus</i> Fourcroy (1785) = <i>Rhagium bifasciatum</i> Fab.	Thomson (1864)
	Fabricius (1775)	<i>Cerambyx inquisitor</i> L.	Swaine et Hopping (1928)
		<i>Leptura meridiana</i> L.	Plavilstshikov (1936)

が *Leptura schaefferi* Laicharting (1784) のシノニムであることが認められた。そうするとこの種はすでに Serville (1835) により *Akimerus* 属に入れられており (monobasic?), *Toxotus* Serille は *Akimerus* のシノニムと考えられることになる。

Aurivillius は属の設立を Zetterstedt (1829) とし、この模式種を *C. cursor* L. としているので、この場合は *Oxymirus* は *Toxotus* Zett. のシノニムとなる。

一方 Westwood (1840), Newman (1840) は *Toxotus* の設立者を Dejean (1821) として彼のカタログを文献として認め、前述のように Westwood はその模式種を *L. meridiana* L. と指定し Newman も同様にこれを認めている。Chemsak (1964) はこの説を再採用し、*Toxotus* Dejean と, *Stenocorus* Fab. とは模式種が同じ為、属の設立の古い方の *Stenocorus* を生かし、*Toxotus* をこの属のシノニムとし、指定の古い新しいについては考慮していない。Gressitt (1951) は逆に *Stenocorus* Fab. の方を *Toxotus* Dejean のシノニムとした。今まで日本でも故大林氏や林氏も *Stenocorus* を認めて居られなかつたが、*Stenocorus* を否定する理由がない以上、指定に関しての問題は残るが、歴史的に古いこの属を採用しなくてはならないであろう。

Dejean (1821) を認める立場を取れば、*Toxotus* はシノニムとなって消えるし、認めなければ、*Toxotus* Zetterstedt (1829) となって残ることになるが、*Stenocorus* の亜属が適當と考えられ、何にしろ独立属とはならないので、*Toxotus* に基づく *Toxotini* を廃止し、色々とこの族の内容その他で疑点は残るが、戦前使用していた *Stenocorus* に由来する *Stenocorini* を使用する方が良いと思う。これらの属の関係を第 6, 7 表に示した。

(ii) Lepturini 中の属の性格の変更

Leptura Linné (1758) の模式種とその指定を第 8 表に示す。

第 8 表 属 *Leptura* L. の模式種とその指定
模 式 種 指 定

<i>Rhagium mordax</i> Fab.	Latreille, 1810
<i>Leptura elongata</i> DeGeer	Curtis, 1831
<i>L. quadrifasciata</i> L.	Westwood, 1840
<i>L. virens</i> L.	Thomson, 1860, 1864
<i>L. melanura</i> L.	Des Gozis, 1886
<i>L. virens</i> L.	Gahan, 1906
<i>L. rubra</i> L.	Plavilstshikov, 1936
<i>L. quadrifasciata</i> L.	Gressitt, 1951
<i>L. rubra</i> L.	Heyrovsky, 1955
<i>L. quadrifasciata</i> L.	Chemsak, 1964

この様に *Leptura* については色々の説があり、特に戦後アメリカの学者達、Gressitt (1947), Chemsak (1964) らが、従来用いられて来た模式種が間違いであるとして変更したため、それに従って属名も大きく変った。日本のカミキリ界でもこれを採用したので戦前とはすつから属の性質が変化し混乱を

生じたが、ヨーロッパでは依然として従来の属名を用いている人が多い。

以前は上記の *Leptura* の模式種のうち、*L. vires* Linné (Thomson 1860, Gahan 1906) か、又はこの種を Reitter (1912) が亜属 *Lepturobosca* の模式種とした後は、*L. rubra* Linné をあてる人 (Plav. 1936 玉貫 1942, Heyrovsky 1955 など) が多く、*Anoplodera* は本属の亜属として用いられていた。

Strangalia は *maculata* Poda (Westwood 1840 指定) か *melanura* L. (Plav. 1936 指定) が用いられており、*Aurivillius* (1912) もおそらく同様の意見であったので、翅鞘の細い 5 種をもって *Strangalina* として新亜属を作ったのであろう。この模式種は Swaine ef Hopping (1928) により、*L. attenuata* Linné があてられた。

Gressitt (1951, 1970) は *Strangalia* の模式種は *L. attenuata* であるとし、Chemsak は Thomson (1860) 指定の *L. luteicornis* Fabricius を採ったので、何にしろ *Strangalina* は *Strangalia* のシノニムとなった。アメリカ学派の意見は *Leptura* は Westwood (1840) 指定の *L. 4-fasciata* であるとしたので、*Anoplodera* は *Leptura* の亜属ではなく、独立属となり、*L. virens* や *rubra* も *Leptura* ではなく、*Anoplodera* に含まれる事となった。その変化を第 9 表にまとめた。なお現在進行中の *Lepturini* の属の細分化についてはここでは触れない事にする。

付記 1. *Rhaphuma* について

前号の原稿を提出後、Gressitt & Rondon (1970) の「ラオスのカミキリ」を読み、トラカミキリの所に関して彼等の意見が妥当だと思うので付記しておきたい。

Rhaphuma の模式種については 1951 年の時とは異なり、*Clytus quadricolor* Cast. & Gory を認め、また *Grammographus* については以前と同様に *Demonax* のシノニムとしている。*Rhaphuma* は *Chlorophorus* と *Demonax* の中間に位置する属で 3 属とも非常に類似し、連続的な関係にあるが、次のような特徴でそれぞれ別属としている。なおこれらの特徴は以前から言っていた所ではある (P. 234)。*Rhaphuma*: 触角の第 3 節がより長く、体は細長く、長い触角と脚を有し、一般に黄色又はオリーブ色の軟毛を有する。*Demonax*: 触角の第 3 および第 4 節に突起を有するが、この突起は非常に変化する。色彩は *Chlorophorus* に類似し、一般に黒か灰色であるが、狭い体とより長い脚を有する。*Chlorophorus*: 一般により頑丈で、他より短い触角と脚を有する。

日本のこの附近のトラカミキリの分類は現在非常に混乱しているが、以前の分類とほぼ同じような形に戻したら良いのではないかと思う。

付記 2. *Sophronica* について

第9表 Lepturini族の属名の変更

時代	属名	タイプ種
戦前	<i>Strangalina</i> Aurivillius ↓ <i>Strangalia</i> Serville	<i>Leptura attenuata</i> Linné 〔 <i>Leptura luteicornis</i> Fabricius 又は 〔 <i>Leptura attenuata</i> Linné〕〕
戦前	<i>Strangalia</i> Serville ↓ <i>Leptura</i> Linné	〔 <i>Leptura melanura</i> Linné 又は 〔 <i>Leptura maculata</i> Poda <i>Leptura 4-fasciata</i> Liunč〕〕
戦前	<i>Leptura</i> Linné, ↓ <i>Anoplodera</i> Mulsant	〔 <i>Leptura virens</i> Linné 又は 〔 <i>Leptura rubra</i> Linné <i>Leptura sexguttata</i> Fabricius〕〕
最近		

Thomson (1860) を読んでいたら、1845年に Blanchard の作った属は何れも種が含まれていない事に気が付いた。Sophronica は Thomson 中に書かれていないが、これもその一つと考えられる。そうするとこの属中の最古のものは Lacordaire (1872) の指定した *carbonaria* Pascoe (1864) で

なく、*calceata* Chevrolat (1855) の為、最初にこの属に入れられたのは後者ではないかと考えていた。「ラオスのフトカミキリ」 Rondon & Breuning (1970) の 487 頁に、この属のタイプ種に *calceata* Chev. がなっていたのを知り、自分の推論が裏づけられた感じである。

○台湾から始めて記録されるクワガタムシ

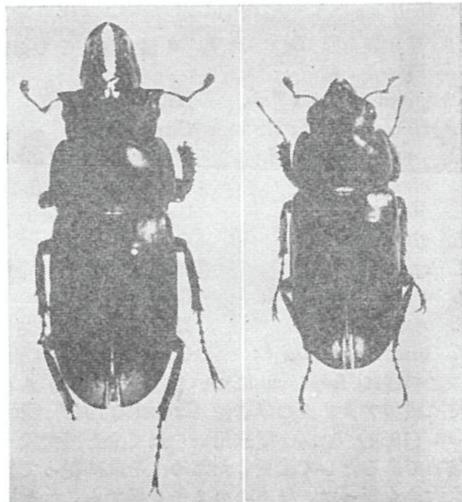
台湾は昆虫が極めて豊富で、いくらでも新種や未記録種が出て来る。クワガタムシ科のような人目を惹く大型の甲虫類ですら、戦前に三輪勇四郎博士によって調べ尽されていたように思えるが、戦後になって、ツノボソオオクワガタ (新称) *Dorcus gracilicornis* Benesh, 1950, セスジオオクワガタ (新称) *D. clypeatus* Benesh, 1950, クリイロミヤマクワガタ *Lucanus kanoi* Y. Kurosawa, 1966, キアシミヤマクワガタ *L. miwai* Y. Kurosawa, 1966, マルバネノコギリクワガタ (新称) *Metopodontus austerus* (DeLisle, 1967) など既に 5 種類が記載され、まだ種名未確定の種類が私の手許に数種ある。以下に記録する 2 種も台湾からは今回始めて記録される種類で、これで台湾に産するクワガタムシ科は三輪博士によって記録された 37 種に上記 5 種とこの 2 種を加えて 44 種にもなる。日本産は琉球と小笠原を加えても 27 種だけで、日本本土に産するものはわずかに 19 種に過ぎないので、九州とほぼ同面積の台湾に九州の 3 倍余の種類を産するのは驚異である。

Prismognathus davidi Deyrolle, 1818 タイワニキンオニクワガタ (新称) 2♂♂, 台中県和平郷梨山, ix. 1968; 4♀♀, 同, viii, 1970。

朝鮮、満洲、シベリア東部から北支那にかけて分布するキンオニクワガタ *P. dauricus* Motschulsky, 1860 によく似ているが、頭楯が狭く、複眼前の横の突出が強く、色調が強く黒味を帯びる。中支那から記載された種類で、北支那からシベリア東部にかけて分布するキンオニクワガタとは亜種的な関係にあ

るのかも知れないが、肝心の中支那の標本を検することが出来ないので何とも云えない。台湾産も亜種の検討が将来に残るが、一応産することだけを報告しておく。なお、衣笠惠士博士の御手をわざらわして、鮮明な写真を掲げることが出来たことを銘記して同博士に感謝する。

Aegus caprinus Didier, 1928 ヒメネブトクワガタ (新称) 2♂♂, 嘉義県竹崎郷咬力坪, 11. vii. 1961, 上野俊一採集; 1♀1♂, 竹崎郷奮起湖, 8~9. vii. 1961, 上野俊一採集; 1♂1♀, 台中県和平郷環山, 20. vii. 1961, 上野俊一採集; 3♀♀, 南投県埔



Prismognathus davidi Deyroele ♂, ♀

里附近, vi. 1957.

小型の種類で体長(大脛を含む) 13~17mm(♂), 11~14mm(♀)。台湾ネプトクワガタ *Aegus formosae* Bates, 1866 の小型の個体に似るが、淡色で大脛の形が異なる。また翅鞘の間室の隆起の状態も多少異なる。インドシナのトンキンとアンナンから知られる種類で、フランスの M. de Lisle 氏によればこの種類に当るだろうと云う。台湾では台湾ネプトよりやや高地に産するようである。

(国立科学博物館, 黒沢良彦)

○南大東島のタマムシ

沖縄本島の東方、太平洋に浮ぶ南大東島からはタマムシの記録が1種類も見当らないが、芝田太一氏と林 正美氏の御好意で同島産のタマムシ2種を検することができたので報告しておく。

1. ウバタマムシ *Chalcophora japonica japonica* Gory, 1852, 25. vii. 1965, Y. Hama 採集。
2. サツマウバタマムシ *Chalcophora yunnana abnormalis* Miwa & Chujō, 1852 ♀, 26~30. vii. 1965, Y. Hama 採集, 3♂♀, 4 & 15, vii. 1971, 林 正美採集。

ウバタマムシは日本本土産と同亜種、サツマウバタマムシは沖縄本島産と同亜種と云う奇妙な結果が出ているが、これは両種とも南大東島に以前から産したものではなく、加害植物である松材について、本土と沖縄からそれぞれ異ったルートで移入されたものと推定される。終りに貴重な標本を検する機会を与えて下さった芝田太一氏と林 正美氏に感謝する。

(東京都世田谷区, 黒沢良彦)

○利尻島のカミキリ3種について

1970年に北海道利尻島を訪れた田中彰氏が花上で採集してきたというカミキリのうち、「原色日本昆虫生態図鑑 I カミキリ編」に利尻島の分布が入っていないものが3種あったので報告しておきたい。

1. ホクチチビハナカミキリ
Alosterna tabacicolor (De Geer)
1♂, 18~19. vii. 1970
2. シララカハナカミキリ
Judolia sexmaculata (Linné)
1♂1♀, 18~19. vii. 1970
3. カエデノヒゲナガコバネカミキリ
Molorchus ishiharai Ohbayashi
1♂, 18. vii. 1970, 姫沼附近
カエデノヒゲナガコバネカミキリは原産地宮島や中国地方のものと比較して、特に差は見い出せなかった。なお、以上の標本は筆者が保存している。末筆ながら標本の提供と発表とを許された田中彰氏に感謝したい。

(横浜市金沢区, 高桑正敏)

○九州のサワフタギからも

トガリバホソコバネカミキリが羽化

小岩屋敏氏が1970年5月29・30日、九重山雨ヶ池越にてサワフタギの類と思われる立枯を採取し、6月7日筆者の手元に届けられた。この立枯材の多く

は半朽木の状態であったが、6月18日にトガリバホソコバネカミキリ1♂、続いて6月25日にも1♂1♀が羽化脱出しているのを確認した。尚、同材より6月16日までにヘリウスハナカミキリ3♂♂4♀♀、ホソハナカミキリ4♂♂3♀♀、7月10日と8月5日にキオビナガカッコウムシ計3頭が羽化脱出した。

本州では既に天城連山のタンナサワフタギ材よりトガリバホソコバネカミキリが多数羽化脱出しているが、天城山以外での飼育はこれが初めてかと思われる。(横浜市金沢区, 高桑正敏)

○ヘリウスハナカミキリの北限?

肥後湯山を原産地とするヘリウスハナカミキリは、本州では中部山岳から日光附近にまで分布することが知られており、日光周辺が本種の分布の北限であるとされてきたが、1971年6月20日、筆者はその1♀を飯豊山温身平に近い山形県小国町川入の奥で、ミズキの花上から採集した。

新潟県からは、既に筆者(1961, 新潟県の昆虫, vi)の奥只見の記録があるが、上記の発見によって、より北の方にも分布することが判明した訳である。

(新潟県新発田市 小池 寛)

○コツヤマグソコガネの新産地

コツヤマグソコガネ *Aphodius asahinai* Nakane は九州では阿蘇山の草千里から発見されているが、筆者の採集品中に下記の標本があるので本種の新産地として報告する。なお標本の同定をお願いした三宅義一氏に御礼申し上げる。

1♀, 18. vi. 1961, 熊本県阿蘇郡久木野村清水, 大塚 熱採集 (熊本市, 大塚 熱)

○アラメハナカミキリの採集記録

アラメハナカミキリは稀な種で、奥日光での記録が最も多いようですが、次の記録があるので報告します。

1♀, 12. vii. 1970, 奥日光湯元
湯元付近の切込・刈込湖へ通じる路上を飛翔しており松の枝に止まった所を採集しました。
(東京都練馬区, 清水昭平)

○オオミドリナガタマムシを九州釧路岳で採集

オオミドリナガタマムシ(アオナガタマムシ)

Agrilus marcopoli ulmi Kurosawa, 1956 は九州よりは現在まで英彦山より1例の記録(1959彦山昆虫目録Ⅱ鞘翅目: 1♀, 29. vii. 1949, Y. Yamawaki)を認めるにすぎなかったが本年次のとおり採集したので報告する。

1♀, 釧路岳(福岡県八女郡矢部村, 1230m), 28. vii. 1971, 佐田採集保管

釧路岳は福岡県南部県境に連なる県下最高峯、地質植物相共に英彦山に相似し昆虫相の豊富な地域とされていたが、殆んど調査されぬまま近年杉への植樹転換が急速に進み自然林は消滅寸前の状態にある。本個体は体長15mm、林道工事の伐採地(1000m地点)にて得たものである。末尾ながら御教示頂いた黒沢博士に謝意を表する。(大牟田市, 佐田禎之助)

○ヤマウチチヤイロコガネの新産地

ヤマウチチヤイロコガネ *Sericania yamauchii* Sawada は九州では福岡県の英彦山、障子岳でのみ採集されている珍らしいコガネムシであるが、筆者は本種を下記のとおり採集したので本種の新産地として報告する。なお本種について御同定ならびにいろいろ御教示頂いた三宅義一氏に厚く御礼申しあげる。

18, 10. viii. 1971, 熊本県八代郡泉村久連子
採集した標本は民家の燈火に飛来し死んでいたものである。
(熊本市、大塚 純)

○九州産キンスジコガネの新産地

キンスジコガネ *Mimera holosericea japonica* Machatschke は九州では福岡県八女郡星野村広蔵、同星野村熊渡山、熊本県上益城郡内大臣にて各1頭採集されているにすぎないが、筆者は本年、本種を下記のとおり採集したので報告する。

(1) 2頭, 10. iv. 1971, 熊本県八代郡泉村久連子
(2) 1頭, 11. viii. 1971, 同上

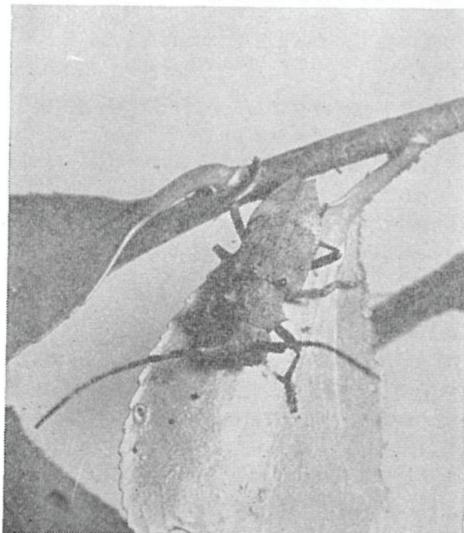
(1)は民家の燈火に飛来し、死んでいたものを採集したものであるが、(2)は当日燈火に飛来したものである。標本の同定を頂きいろいろ御教示頂いた三宅義一氏および採集に協力頂いた吉崎一章氏に厚くお礼申しあげる。
(熊本市、大塚 純)

○屋久島におけるオスグロオオハナノミの記録

筆者の不勉強で屋久島におけるオスグロオオハナノミ *Macrosiagon cyaniveste* の記録の有無を知らないが、大図鑑の甲虫篇には北海道、本州、四国、九州が本種の日本の分布地となっていて、屋久島は記されていない。私の手許には屋久島産の1頭があるのでここに記しておきたい。

18, 14. vii. 1971, 屋久島宮之浦、竹下博採集
なお、標本を恵与下さった竹下博氏に深謝する。

(横浜市金沢区、高桑正敏)



○新潟県弥彦山のコブヤハズカミキリ

中臣謙太郎氏により新潟県弥彦山にて1971年9月25日に採集されたコブヤハズカミキリ *Mesechthistatus binodosus* 1♀は従来知られていた型と異なる形態を持ち、また生態的にも生葉の後食を行った点、興味深いことなのでここに記しておきたい。標本を恵与下さり、発表を許された中臣謙太郎氏には日頃からお世話になっており、心から感謝する。

中臣氏は弥彦山中腹にてシャチホコガの幼虫を探索中、ツバキのピーティングでこのコブヤハズカミキリを得て、生きたまま持ち帰った。シャーレに栽培のサザンカ枝を入れておいたところ、生葉及び枝の一部を後食した。その後10月2日に筆者が譲り受け、自宅のサザンカを与えたところ、やはり好んで後食し、コナラ枯材にまきついていたツタの1種もわざかながら食した。これまで、コブヤハズカミキリの後食例としては、下山健作氏(1964)によるキイチゴが知られ、藤田宏氏も草の1種を後食したと言う。筆者はこの個体にキクの1種も与えてみたが、これはまったく食さず、10月28日に死亡した。

この個体の形態的特徴は、体型と上翅端であろう。写真からはよく判らないかも知れないが、上翅の中央後方が急にせばめられているため横幅が広く、一見フジコブヤハズの体型に似る。上翅端は斜めに切れるだけで、普通のコブヤハズのように長く鋭くない。この2点と上翅の白黄色紋が著しく拡大しているために異なった感じを受ける。

コブヤハズカミキリは普通、標高800m以上で得られるが、今回のように標高600m余の海岸部の弥彦山中腹で得られたことは面白い。他産地と距離的に離れ、また独立した山なので、弥彦山の本種が従来の型と異なっているとしても当然だろうが、今後、この地の本種がもっと採集されることを期待したい。
(横浜市金沢区、高桑正敏)

○ビロウドカミキリの1後食例

1971年8月15日、露木繁雄氏と静岡県梅ヶ島温泉へ八紘嶺を訪れた際、八紘嶺近くの標高1600~1700mあたりで、ビロウドカミキリ *Acalolepta fraudatrix* 1♀を採集した。この個体はアザミの1種の葉上にいたが、アザミの葉の枯れた部分を後食している最中であった。葉の枯れた場所をよく見てみると、成虫が葉脈をかみ切って枯らしたように思えた。こうした習性がビロウドカミキリに一般に見られるのかどうかは知らないが、わざわざ枯らしてから後食するとすれば面白い。

(横浜市金沢区、高桑正敏)

甲虫談話会

会費(1カ年)500円、第15号は2月末発行予定。
投稿締切は12月30日。

発行人 黒沢良彦

発行所 甲虫談話会 東京都台東区上野公園
国立博物館動物研究部内
電(822)0111、振替東京60,664